

図書館資料としての旅行案内書（一）

門上 光夫（中央図書館）

はじめに

どこに旅しようか。これから行く旅先に何があるのか。どう行けばよいのか。どこに泊まればよいのか。その土地ならではのおいしいものは何か、を教えてくれる旅行案内書 (1) は旅の必需品である。

ところが、「これから行く旅行のため」又は「近い将来、行いを為すのに必要な情報を掲載する書物」であるがために旅行案内書は何より新鮮さが要求される保存されない資料とみなされている。

中川浩一は『旅の文化誌 - ガイドブックと時刻表と旅行者たち』（伝統と現代社 1979 年 2 月）で、学習参考書と並んで旅行案内書が「このの実行に先だってまず読まれ、この最中によりいっそうの愛用をうけ」、「購入の目的を果たして後は、運がよくてもお倉入りとな」る。「それらは消耗品扱いされ、新陳代謝がたえず実行されてもきた」。「それを使って実益が得られると、次には弊履のように捨てられもする。まこと、はかない運命というはかない。古書としてのそれが、市場にあらわれる機会も少ない」書物であると述べている（「まえがき」1-2 頁）。

また、岩田晋典も「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」『立教大学観光学部紀要』第 12 号（立教大学観光学部 2010 年 3 月）で旅行案内書を「基本的に図書館に保存されない」「いわば“使い捨て”の出版物である」とし、立教大学図書館でも『地球の歩き方』シリーズなどが処分されていると記している（14 頁）。

ホームページで公開されている図書館の「資料除籍基準」を見ても (2)、「出版後数年が経過して、内容が現状と遊離した旅行案内書」、「購入より数年を経て内容的に利用価値が著しく低下している資料」、「内外事情により今日的ガイドブックとして役立たなくなった案内書」は除籍するもの、図書館では保存しないものとされている。

しかし、そうした基準を定めながらも、当該地域に関する資料は除籍対象としないとする図書館がある。当該地域を対象とした旅行案内書がどの程度、保存されているかの調査を筆者は行ってはいないが、地方の公共図書館として、旅行案内書が地域資料として永久

に保存される資料と位置づけられていると読むことは可能であろう。

本論の目的は、旅行案内書が図書館資料として重要なものであること。特に地域資料としてはなくてはならない不可欠な資料であることを、旅行案内書をテキストに用いた研究成果を挙げながら実証していくことにある。

第一節、第二節、第三節では、旅行案内書の資料価値について言及し、旅行案内書からどのようなことが読み解けるのかに注目する。

続く第四節、第五節では、近世の旅行案内書も射程に加え、そもそも旅行案内書とはどのような形態のものをいうかについて言及していきたい。

本論では、2008年度に大阪府立中之島図書館で筆者が企画担当した小展示「シリーズ観光の大阪展-旅行案内書 [ガイドブック] にみる大坂 大阪 OSAKA-」で紹介した大阪の旅行案内書も挙げていく。合わせて参考にされたい (3)。

第一節 旅行案内書の資料的価値について

旅行案内書は「アピール」と「まなざし」の交差点である。

「アピール」とは、読者（≡旅行者）に向けられた地域からの誘いである。地球上にはさまざまな気候風土を持つ地域がある。海、山。低地、高地。温暖な土地、寒冷な土地。乾燥した土地。四季それぞれの風景を見せてくれる場所。都市。

そこには多様な生活を営む人々がいて、アジア、アフリカ、ヨーロッパ等それぞれに異なる歴史と文化が育まれてきた。また、長い年月をかけて生成された自然景観もある。

旅行案内書に載る地域は読者（≡旅行者）に、ここがいかにかに旅行する人々の好みに合うか、実際に旅行するに際して不都合の生じない土地であるか（＝「良さ」）を盛んにアピールし、人々を旅行へと誘う。

「まなざし」とはこれらの地域に向けられた読者（≡旅行者）の視線である。さまざまな土地があるように、旅行する人々にもさまざまな好みがある。サーフィンを楽しむ人、冬山のスキーを楽しむ人。海辺で憩う人、登山に勤しむ人。人気のない草原に佇みたい人、古代遺跡に接したい人、大都会でショッピングをしたい人。

アジアの雑踏に触れたい人もいれば、アフリカの大自然に浸りたい人もいるであろう。

読者（≡旅行者）は自分なりにイメージを浮かべながら、その旅行をもっと楽しく、もっと充実したものとなるようにその土地の情報を読み込んで、自らの旅行を企画・構成す

る。

書架に並べられた旅行案内書には人々を旅行へと誘う記述がなされ、人はそれを読み込んで行きたい土地を選択する。旅行案内書のもっとも基本的な用途はこのようなものであるろう。

旅行案内書と旅行行動の関係をメディア論的視覚から明らかにすることを試みた岩佐淳一は「旅行とメディア - 戦前期旅行ガイドブックのまなざし -」『学習院女子大学紀要』第3号(学習院女子大学 2001年)の冒頭部分で、「メディアによって定義づけられた現実とは状況づけられた主体としての個人の〈読み〉とせめぎ合いながら人々の現実認知や対象、空間認識などに大きな影響を与える」と記す。そして、旅行行動においても、テレビや、旅行代理店の作ったパンフレットによって「予めその土地についてのイメージが先行して」おり、特に旅行案内書がメディアによる動機づけの大きな部分を占めているという。先述した「アジア→雑踏」や「アフリカ→大自然」というフレーズもメディアによって定義づけられた所産といえよう。

旅行案内書は「周遊する場所の選定、旅行情報入手手段として必須アイテムであるばかりでなく、旅行という行動を規定する大きな要因」であると指摘している(11頁)。

しかし、重要な点は人々が一方的にメディア(旅行案内書)に影響されているばかりではない、ということである。

岩佐は、大正期に旅行目的がそれまでの「神社仏閣参詣」から山水ブームを背景とした「風景の探勝」に転換し、このまなざしの転換によって、「新しい旅行目的に見合ったかたちでの媒体=旅行ガイドブックの需要」が発生し、旅行案内書が次々と刊行されることになったとも指摘している(17頁)。「メディアによって定義づけられた現実」と「主体としての個人の〈読み〉」はまさに「せめぎ合」っているのである。

「せめぎ合う」と表現されているように、「アピール」と「まなざし」が交差する地点は一定不変のものではない。地域は交通網の整備や開発、抱える人口の推移により絶えず景観が変化している。変化に伴い「アピール」も変容せざるを得ない。また人々も、余暇の拡充や経済状態によって生活スタイルが変化する。変化に伴い、旅行目的は転換し、旅先に向ける「まなざし」も変容する。時代によって異なる「価値観」や「美的感覚」によってもこの交差点は変わっていく。

旅行案内書は動的な交差点を読み解くことで、記述された地域が持つイメージとその変遷を探るツールともなりうる。ここに、旅行案内書の資料的価値がある。

例えば、昭和初期の「大大阪」と呼ばれていた時期、大阪は人々に何をアピールしていたのか。また、そのような大阪に人々はどのようなまなざしを向けていたのか。次に引用するのは、大大阪時代に就航していた観光艇「水都」の観光アナウンスである (4)。

「咲くや木の花 浪速津」の 水の都と謳はるゝ 大大阪活動躍進の実況を 水の上から皆様に 観光して頂きたいといふ 大阪独特のサービスで 建造致しましたのが この 観光艇「水都」でございます。船は先づ 船首を東に向けまして……

◇

いよいよ 出船入船が盛んになつて参りまして

「よしあしげき 浪速津」

の水の賑ひを展開致します。この辺から 次ぎ次ぎに大工場が立ち並び 工業大阪の心臓部となつて参ります。

◇

浪速がた なににもあらず みをつくし

深き心の しるし ばかりぞ

そのみをつくしから かたどりましたのが 現在の大阪市のマークでございます。

こゝ 大阪港は 世界的の大門戸……

鷗飛びかふ茅渚の浦 波をへだてゝ 金剛、葛城の連山や堺の大仙陵 さては六甲連峰から 通ふ千鳥の淡路島まで 指呼のうちに眺めることができます。

◇

御覧の通り このあたり一帯は 盛んな工業地帯でありまして 躍進日本の産業舞台に 重要な役割を演じてゐるのでございます。この一帯 川を工場の一部として 汗まみれに活動してゐる状況を よろしく御観察願ひます。

◇

まことに大阪は 水の都の名にそむかず 約七十の川筋に 一千三百近くの橋が架せられ その岸に近く その橋に近く 船を我家として 市内の川筋に碇泊いたして居ります船世帯の数は 約五千人 人数は一萬五千と数へられて居ります。目のあたり見る水上生活、川柳に

這ふて出る 子にかゝはらぬ船世帯

といつて居りますが 誠に きのうは東 けふは西 水を家なる人々の生活こそ 私達の想像も及ばぬところでございます。

「水都」の観光コースだけでなく、川面に出船入船が多数あったこと。大阪港から金剛、葛城、仁徳天皇陵、六甲、淡路島が見渡せたこと。そして、大工場や水上生活者に観光客のまなざしが向けられていたことを教えてくれる。

このように大大阪時代の、いわば大阪のイメージを当時の旅行案内書は端的に伝えている (5)。そして時代時代の旅行案内書を分析すれば、大阪のイメージがどのように変化していったのかもわかるのである。

もっとも、旅行案内書に限らずおよそ資料とは、書き手の伝えようとする思いと読み手の読み込もうとする思いがぶつかり合う「場」ではある。

しかし、特に近代以降、地域が持つイメージを決定づけるのが大衆であることを思えば、齋藤玲子が指摘するとおり (後述)、大衆に向けて提供された旅行案内書の記事を分析することがこれらのイメージの形成と変遷を読み解く際に不可欠となるであろう。

岩佐は、19世紀に一般化された旅行に付随して旅行案内書が成立し、発展したことを踏まえて、旅行案内書の研究が「近代という時代の意味や意義を知る上で重要な示唆を与え

てくれる」と指摘している（岩佐、前掲、12頁）。

図書館は、以上に指摘した意義を持つ旅行案内書を重要な資料と位置づける必要がある。しかし、類書が多く、年々改訂される旅行案内書のすべてを収集し、保存していくことは困難であろう。したがって、少なくとも、図書館の所在する地域の旅行案内書については地域資料として後世に伝えていかねばならないのである。

次節では、旅行案内書が、地域が持つイメージの形成と変遷を探るツールとなりうることを、これらをテキストに用いた研究成果を通じて実証していきたい。

第二節 研究成果にみる旅行案内書の〈読み〉

■小長谷悠紀「新旧旅行案内書に見る函館エリアの観光対象」

『立教観光学研究紀要』第4号（立教大学大学院観光学研究科 2002年3月）

小長谷は、明治以降の近代化による観光の「価値観」（「見るべきもの」と「楽しむべきこと」）に変化があったことを指摘する。例に北海道南部の駒ヶ岳を挙げ、日本人が「そびえた姿をのぞむもの」だった山が、函館に出入りする外国人によって「登るべきもの」に変容したとする。

このことを踏まえ、この論文では函館を中心とした観光圏について、観光対象の出現と消滅、アピールの変容を、1885（明治18）年から2001（平成13）年までの計20冊の旅行案内書の記述から探ることを試みる。なお、1940年代の旅行案内書は入手できなかったという（6）。小長谷によれば、こうした作業は「観光対象の成立の条件、ひいては観光エリア形成の条件を検討していくための基礎研究」になるという（37頁）。

「推奨訪問先」を古い順に抽出し、対象となる地域や施設などの出現や形容表現について分析を試みる。

明治期、第二次世界大戦前、第二次世界大戦後に区分して分析した結果、「北海道開拓・産業視察」→「北日本一のモダンな都会」「都市美」→「古い開港場の雰囲気や鯨漁場の名残（対近代のノスタルジー）」→「洋館立ち並ぶ（西欧憧憬）」→「エキゾチックな港町」または「店々のたたずまい、親近感のわく街並み（対現代・近過去のノスタルジー）」と「時代折々の新たな視点に応じ、違う姿でとらえられてきた」函館の姿を見出している（41頁）。

■今野理文・十代田朗・羽生冬佳

「観光ガイドブックにみる観光地のアピールポイントの変遷」

『観光研究』Vol. 14 No.1 (日本観光研究学会 2002年9月)

ここでは、日本の代表的な観光地である日光を対象に、大正期、昭和初期、昭和20年代後半の日本語と英語で書かれた6冊の旅行案内書(7)における記述を比較して、日本人と外国人のそれぞれに対するアピールポイントの変遷と、それと時代との関連性について考察している。

最初に「ガイドブックの構成」については、英語の旅行案内書では、「日光から足尾へ」や「中禅寺から日光湯元へ」といったゾーンニングで記述され、3日と7日の旅行プランが記載されている。対する日本語の旅行案内書では名勝は単に羅列されているだけで、旅行プランも英語版より短い2日と3日のものとなっている。このことから、外国人と日本人の旅行スタイルには違いがあり、外国人の「リゾート型」に対して、日本人は「周遊移動型」の観光が想定されているとする(11頁)。

「記述された名勝の数」では、大正期と昭和初期までは英語版の方が記述は多いが、連続的に減少しており、外国人のリゾート型観光地だった日光が、時代とともに大衆化し、日本人も多く訪れる地となっていったとする定説が旅行案内書の記述から裏付けられたとする(12頁)。

また、記述されている観光スポットの解説文の比較を行っている。エリア別の解説文の行数比率では、英語、日本語版ともに日光社寺が観光のハイライトとはなっているが、英語版では戦前にすでに「丸沼」「尾瀬沼」が記載。日本語版では、記述内容が信仰対象から登山・ハイキング案内へ変容しており、観光の自然資源が外国人により見出されたこと。また、日本人が崇める対象であった自然資源に外国人の持ち込んだ「山岳美」「近代レクリエーション」が取り込まれていったことを指摘している(13頁)。

名勝の紹介記述のタイプを数量化理論を用いて「見る型」「遊ぶ・知る型」「安らぐ型」に区分したところ、「華厳滝」「東照宮」「杉並木」などメジャーな名勝の表現は英語版、日本語版ともに、前者二つが「見る型」、「杉並木」が「安らぐ型」で記述されており、かつどの時代でも記述が不変である。しかし、例えば「裏見の滝」は、英語版が「遊ぶ・知る型」なのに対して、日本語版は「見る型」から「遊ぶ・知る型」に移行している。近代レクリエーションが外国から日本に普及したことを踏まえ、マイナーな名勝は「その時代の

志向に合わせアピールポイントを変え生き残ってきたともいえよう」と結論づけている(15頁)。

■岩田晋典「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」

『立教大学観光学部紀要』第12号(立教大学観光学部 2010年3月)

本論の冒頭に紹介したこの論文では、渡航自由化以降の海外旅行ガイドブックの全体像を明らかにすることが掲げられている。そして、「デスティネーション(行き先-引用者註)として選出される地域にどのような単位が多く、かつ、どのような地域が好まれてきたのかなど」の問題を明らかにし、そうすることで、ガイドブックというメディアの中で、海外旅行の『海外』がどのようなものとして生産されてきたのか」が論じられている(7頁)。

調査対象とした旅行案内書は、1964(昭和39)年から2008(平成20)年までに刊行された212シリーズ、計6906点に及び(8)、これらに取り上げられた地域名を分析する。

出版社系列別に見た出版点数は、ダイヤモンド・ビッグ社、JTB、昭文社の大手三社が53.1%を占めている。一方で、刊行年の短いシリーズが多数出版されているという(21頁)。

旅行案内書の一冊単位のデスティネーションは「国家に大きく規定されている」(21頁)。

2008年の出版点数を見ると、「中国」や「フランス」といった「国内レベル」のものが334点。「ロンドン・パリ・ローマ」や「南米」といった「国家間レベル」のものが53点となっている。なお、国内レベルに留まるが、1980年代以降は国内の地域名および都市名のみを記載する細分化がみられる(21-22頁)。

また、例えばマカオの旅行案内書は96.6%他の地域と合わせて出版されている(複数率)。対になると考えられる香港の複数率は52.2%である。他にも、チェコが89.1%、ポルトガルが61.2%となっており、マイナーな地域はメジャーな地域に「抱き合わせ」るかたちで出版されていることも数値化されている(24頁)。

取り上げられた大陸別・国家別の推移は、1965年に15地域しか記載されなかったデスティネーションが、2000年代には30余ヶ国89地域に広がっており、対象地域が多様化している。一方でアメリカ合衆国、ハワイ、中国といった人気のデスティネーションが固定化している。「西欧、東アジア、オセアニア、東南アジア、北米」で全旅行案内書数の九割を超しており、その他の地域の出版点数は横ばい又は若干の減少傾向を示しているという。

他に、SARSや同時多発テロといった突発的な事件と旅行案内書の出版点数が関連してい

ない傾向にあることも分析している。

最後に、これらの研究が「アウトバウンド・ツーリズムの量や質を計るための新たなパースペクティブとなる可能性が期待できるのではなかろうか」と結論づけている(29頁)。

■橋本佳恵「観光案内書の写真情報にみられるジェンダー表現に関する研究」

『立教観光学研究紀要』第1号(立教大学大学院観光学研究科 1999年3月)

ハワイの旅行案内書に掲載された写真の分析を通して、「男女の取り上げられ方の差異」と「それが内包する問題点」について考察した論文である。

『JTBポケットガイド ハワイ』第五版(JTB出版事業局 1997年8月)と『ブルーガイド・ワールド ハワイ』第二版(実業之日本社 1998年1月)をテキストに、「対象資料の写真情報における人物登場件数」(写真総件数/人物の登場件数/男性の登場件数/女性の登場件数)、「写真情報に登場する人物の属性」(年代/所属(旅行者/地元))と「行動場面」(仕事/遊び/食/買物)、「広告頁を対象にした写真情報に登場する人物の属性」(年代/所属)を検討している。

結果的には、男女間の登場割合はほぼ同じで大きな差異はないが、取り上げられ方については、男性が専門的技術を持つ者として描かれているのに対して、女性は、被写体が圧倒的に若年齢で、専門的な技術を持たないビーチアクティビティ(マリンスポーツなど)や食、買物に集中しているという。

具体的には、ゲストとして描かれる女性は「観光スポットにおける海浜アクティビティーの中に頻繁に登場」し、ホスト側では「主としてレストランにおけるウェイトレスや商店の一般販売員」である(27頁)。

広告頁の分析からは女性は「民族的な衣装でただ微笑むあるいは意味もなく体の露出が高いなど、セックスアピールを期待されている」。「金髪の白人がモデルとして登場しているケースも少なくない」(30頁)。

ホストに描かれる男性が「マリンスポーツのインストラクターや民族文化紹介者」、レストランでも「シェフとして熟練の技を見せる、といった位置づけで描き出されていることが多い」(27頁)のとは対照的である。

こうした傾向について、「情報の発信側の社会・文化圏の問題に留まらず、取り上げられた他の社会・文化圏にも、間接的ながら強い影響を及ぼす」(31頁)とし、経済的に強弱

関係のある中においては、観光客を受け入れる弱い立場の地域の女性の位置づけをより固定化させてしまう懸念があると指摘している。

また、「情報はカメラマンや編集者などの発信側の意識の反映であり、その点では作り手・発信者側の問題が大きい。しかしそれと同時に、情報の利用についての選択が読者（旅行者）側に委ねられている点で、受け手側の意識・期待からずれないものが選択されているわけであり、発信者と受信者両者によって必要な役に立つ情報が全体の中から切り取られ、記述されることにより、結果としてもつばら目先の情報が強調されることとなる」（31頁）とも指摘している。

■ 齋藤玲子

「北海道観光案内のなかのアイヌ文化紹介の変遷 - 昭和期の旅行案内・北海道紹介記事の考察をとおして - 」

『昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol. 6

（昭和女子大学国際文化研究所 2001年3月）

「観光における『ステレオタイプなアイヌ文化』はいかなるもので、どのように形成されてきたのかを考察することによって、」『観光活動を通じたアイヌ文化表象とエスニシティ表象との相関関係』を解き」あかす（29頁）ことを目的とした論文である。

方法論として旅行案内書や旅行雑誌等の出版物によるアイヌ紹介の変遷を追うこととしているが、これは北海道観光に関する論考のうち、これらを資料としたものがほとんどないためである。先にも少し触れたが、齋藤は「観光が大衆のものである限り、研究者や関係者に向けて書かれたものではなく、一般向けに提供された記事を分析することは不可欠であろう」としている（30頁）。

齋藤が分析対象とした旅行案内書は全21冊で（9）、これに日本交通公社発行の雑誌『旅』の記事（1938年から1970年）の全12本（原田康子、更科源蔵、三浦綾子などが執筆）を加えている。

それぞれの記事を抜き出して紹介した後、「記事の数、執筆者、対象となる読者、内容（執筆者自身の実体験か否か、研究者からみた質等）」（37頁）に注目し、考察する。

戦前・戦中期には、アイヌの人たちが熊送りを見せ物とし、写真のモデルとなったこと。大正末に八雲と旭川で作製の始まった木彫りの熊が昭和10年代に急激に普及したこ

と（更科源蔵によれば、「生物の形をつくるということは、本当のアイヌは絶対にやっつはならないこと」（『旅』昭和42年7月号）という）を指摘している。

また、昭和20年代が、昭和30年代から始まる北海道観光ブームの「お膳立て」が整う時期ということ旅行案内の記事から「読みとることができる」とする。

記事の執筆は「識者」が中心で、アイヌ文化の日本文化への「同化を肯定しつつ、『滅びゆく』伝統を記録にとどめる必要性を説く内容が繰り返された」（38頁）という。

北海道観光が「質・量ともにピーク」を迎える昭和30から40年代には、アイヌを見世物にしていることに対する批判、観光地の俗化についての言及も始まるとしている。

昭和50から60年代における旅行案内書の「情報誌化」を経て、平成以降では、アイヌ文化を紹介する記事が減少する一方で「食べ物情報」が増加し、記事の表記も表面的なものとなる。しかし、先住民文化が注目され、エコツーリズムが紹介され始めることを挙げ、「アイヌ文化振興法」（1997年）の制定を契機に「アイヌ文化を担う人々の間で、観光の在り方に関して再び積極的な意見交換や見直しがされ始めている」（39頁）ことを読み取っている。

最後に齋藤は、旅行案内書の内容をさらに分析し、「観光客のアイヌ文化に対する需要とアイヌ文化の担い手たちの提供するものとの関わりをも考えていきたい」と結んでいる（39頁）。

■徐己才「もう一つの『内地』からの便り - 大正期における『旅行案内』と朝鮮旅行 -」
『日本文学』第50巻第3号（日本文学協会 2001年3月）

徐は、この論文でいう「旅行案内」を旅行案内書と紀行文の総称であるとし、1910（明治43）年の日韓併合により、朝鮮がすでに「日本の一部であるという実感が改めて必要」となった時、新聞や雑誌による「外地」紹介よりも読者に「リアリティ」を与えるメディアとして「旅行案内」が積極的に利用されたとする。

この時期の旅行は若者に求められた「修養」の一つであり、「若者達に『楽しみ』ながら『新内地』を知っていくという形で、朝鮮という『未知』の世界を『知』の世界へ導き、その過程を通して自己のアイデンティティを獲得させていく」ことが「旅行案内」にできたという（53-54頁）。

日韓併合によって「新内地」となった朝鮮への（日本人の）関心の高まりと、大正期以

降の旅行案内書の刊行ブームの中で朝鮮の「旅行案内」も刊行されていく。しかし、その記述を担うものは朝鮮総督府などの日本を代表する機関であり、「旅行案内」は次のよう役割を担ったと徐は指摘している。

①観光が植民地政府の経済的利潤を与えること。②文化の主導権を日本に掌握させること。③日本が朝鮮を統治することの正当性を保持すること。

そして、「観光地の選定にあたっては、日本との歴史的な関わりが強調」され、「帝国日本によって指定された場所が観光するに最適」となり、日本人が『外地』旅行を楽しむ感覚にまで引き上げる」ことができるという（57頁）。

朝鮮、満州、中国を含む鉄道院『AN OFFICIAL GUIDE TO ASIA』（1913年）は、欧米人への「東洋観光指針」として刊行されたもので、西洋に対して東洋を紹介する「帝国日本による主体」が「自認」（56頁）されている。

朝鮮総督府『朝鮮鉄道旅行便覧』（1923年）では、朝鮮民族や風習を紹介するコーナーを設け、旅行案内の楽しみに寄与する一方で、「朝鮮人程万事に従順なる民族は少なかるべし。（中略）国民にも自ら自主自立の精神乏しく（後略）」と記述され、「新しい保護者としての帝国日本の存在の必要性」が示される（59頁）。

朝鮮拓植資料調査会『四季の朝鮮』（1921年）では、日本人の朝鮮移住に伴って桜の風景が広まっていくことを紹介。「ここ数年も経過すれば、内地の春を奪ふまでに生成し繁茂し、半島の野山に爛漫の香を漂はしめるに至るであらう」と記述し、朝鮮が日本の領土であると旅行者が自覚できるようにされている。

以上のように「旅行案内」による旅の「楽しさ」を演出するために、朝鮮の文化や民族の記述が抑圧・排除又は選び出され、その結果として紹介された朝鮮の観光地がそのまま朝鮮イメージとして固定されていく。「旅行案内」は「そこにある文化や人間に恣意的な解釈を加え、『外地朝鮮』ではなく『内地朝鮮』に加工」するメディアとして機能した、と強調する（60頁）。

徐は、柳田国男の、読書と同じく世界を知ることのできる旅行が近代日本において若者と密接な関係にあった、とする言葉を紹介した上で、若者にとって楽しめる修養としての「修学旅行」があったこと、具体例として広島師範学校『大陸修学旅行記』（1915年）を挙げ、そこに「旅行案内」が添付され、巡った朝鮮の地（南大門、景福宮）が「旅行案内」で指定されているところであると紹介している。

旅行は『膨張していく帝国日本』の形成に関与し、「外地」への修学旅行を通じて「青

年の主体形成」に深く関わったこと。そして、「植民地政府から再構成された『朝鮮』」がイメージされた「旅行案内」は『外地』を紹介する情報誌だけに止まらず、帝国主義的言説を支えるメディアとして働いた」と結論づけている（62頁）。

以上、6本の旅行案内書をテキストに用いた論文を紹介した。

最初の2本は、時代時代で旅行案内書に書かれた、あるいは書かれなかった、観光スポットや観光スポットを記述した文章を分析した論文を挙げた。これらから、例えば函館が「モダン都市」から「エキゾチックな街」へ、のように、その観光地が持つ（持たれた）イメージの変遷を知ることができた。今野らの研究のように、その方法論として旅行案内書の記述を数量化理論を用いて分析したものもあった。こうした研究は、小長谷が指摘するように、「観光対象の成立条件、ひいては観光エリア形成の条件を検討していくための基礎研究」となるものであろう。

次いで、岩田の論文は観光地ではなく、旅行案内書そのものを分析したものである。しかし、それに止まらず、デスティネーションが新たに見出される課程や、その細分化の様子が明らかにされている。

岩田はこの細分化を海外旅行の「成熟化」と相関しているところが大きいという（岩田前掲 22頁）。一方で、山口誠は『ニッポンの海外旅行-若者と観光メディアの50年史』（筑摩書房 2010年7月）で、大陸レベルの記述からスタートした『地球の歩き方』が「都市編」を編集した要因をプラザ合意後の円高（1985年）と購買力をもてはやされたOLによりもたらされ（153-154頁）、2000年以降のスケルトンツアー（往復の航空券と宿泊ホテルだけのパックツアーで短期、低価格を特徴とする）の流行による旅行案内書のファッション雑誌化に見出している（193-194頁）。

山口は「なぜ最近の若者は海外旅行に行かなくなったのか」という問題を立て、スケルトンツアーの流行によって「どこに行っても同じような『買い・食い』体験をする、定番化した『歩かない』個人旅行は、どこでも同じことを繰り返す海外旅行でもあり、一〜二回行けば飽きてしま」い、旅行先よりも低価格が意識されるようになったからだ（220頁）、という文脈の中で岩田のいう「細分化」を指摘している。

岩田とは違った見解を示しているが、このように旅行案内書は旅行行動の背景にある日本人の旅行観を分析する対象ともなりうるのである。

後半の3本の論文は、旅行案内書から、観光的視点だけではなく、ジェンダー表現、

アイヌ文化、植民地朝鮮といった多様な「読み」も可能であることを明らかにしている。

それと同時に、旅行案内書の記述がそのまま「事実」を伝えているわけでないことを考慮しなければならないことを教えてくれる。民族的マイノリティや植民地住民など、彼ら自身がアピールする主体になく、それを「支配」するものによってアピールされた記述は、そのモノやコトをいやおうなく固定化してしまうことを、3人の論者は強調している。アピールするものやアピールする背景にあるものの分析といった「テキスト批判」は必須である。

しかし、橋本が指摘するように、情報の利用についての選択が読者（≒旅行者）側に委ねられている点で、受け手側の意識・期待からずれないものが選択されていることを考慮すれば、旅行案内書に書かれた記述は、その時のその人たちのイメージの「総意」でもあるといえるだろう。

以上のように旅行案内書は単なる実用書ではなく、「人間の集散的なまなざしを顕現するメディアと考えることができる」のである（岩佐、前掲、26頁）。

次節では、府立図書館が建つ大阪の中之島を記述した旅行案内書の文章を紹介する。アピールとまなざしの交差した中之島のイメージの変遷について、具体的に見ていきたい。

第三節 「中之島」イメージの変遷 (10)

中之島は名前が示すとおり、大阪の市街地を東西に貫く大川（旧淀川）の中洲である。大動脈である御堂筋が中央部の東寄りに南北に走り、交差するところに大阪市役所があって、その周辺に日本銀行大阪支店や大阪府立中之島図書館、大阪市中央公会堂といった歴史的建造物が立ち並ぶ。

ここから東側は公園で東洋陶磁美術館や大噴水を有している。西側には大企業のビル群や国際会議場が位置しており、大阪の政治、経済、文化の発信基地とも称されている。

近世には全国の藩の蔵屋敷が設けられていたが、明治維新以来、これらが無用のものとなり、廃墟、荒涼とした光景で追剥ぎが昼間でも出没したという。

豊国神社の創建（1879（明治12）年）、自由亭ホテルの開業（1881（明治14）年）を経て、1891（明治24）年に大阪の市街地で最初の公園として中之島公園が開設した。噴水が設置され、川に舟が浮ぶなど、中之島は市民の憩いの場となっていく。一方、土佐堀川にそっては、倉庫会社や電燈会社が、そして、筑前橋北詰の大阪府立医学校、玉江橋南詰の

大阪工業学校など近代的な建物のつらなるオフィス街、文教地区にもなり、蔵屋敷にかわる新しい中之島が形作られていった。

2008（平成20）年には中之島の北端に京阪中之島線（地下）が開通。中之島公園もリニューアルされ、大阪の観光地として注目を集めている。

それでは、旅行案内書が記す中之島の解説文を紹介していきたい。最初に資料の解説を付している。かぎかっこ内が解説文で、最後に（抄）とあるのは抄録・要約である。適宜、句読点を加えている。

■島田薫『大阪新繁昌記』（駸々堂 1896年3月）【378/1249/#】

明治以降、新しい技術が導入され、鉄道や汽船が発達し、その結果、「旅客西より東より連々として来阪し、肩磨接踵」蟻の如く「聚るに似たり」と書き、昔とは違う今日の大阪の繁昌がある、と著者はいう。そうした新しい観光地大阪について記した旅行案内書。

「浪花橋の西一域の地市民縦遊の公園を設く、噴泉を設け、飛泉高く水珠を飛ばす。夜は彩色電気を照らして更に観を添ゆるあり、夏時最も賞すべし。豊国神社は東方に鎮座し、明治紀念標屹然として高く雲表に聳ゆるあり、大阪ホテル巍然として亦茲に偉観をなせり。塵煙の中此公園あり。身風塵を厭ふもの朝夕来遊其跡を絶たず、春夏秋の晚景は殊に人影動揺して其賑ひを盛んにす」。(抄)

■道楽山人編『大阪名勝記 附近傍名所案内』（小谷卯三郎 1901年8月）

【378/1047/#】

冒頭に口絵と地図を配す。「難波津に、咲くや此花冬ごもり、今を春べと踏出す、旅路の宿り朝疾く出で、浪華の町の中央の、心齋橋を西に向ひ、見るはよつ橋みつ八幡宮」と調子もよく、名所を案内する。

「園内には幽邃の区なけれども河畔には垂柳嫋々として河風に靡き、老樹の蔚葱たるものなしと雖も緑樹青松梅桜を植ゑ大に風致あり。此間所々に東亭を建て、噴水泉を設く。霧の如く上辺四周に迸る。夜間は電光之に映して虹霓の如く七彩を呈す。東南には明治紀念碑、其後に能舞台、東には豊国神社ありて其背面を望み社殿の薨よりも高く大阪俱樂部（ホテル）の宏壯華麗なる建築物を見る」(抄)

■『大阪案内 附近府縣名勝』（玉鳴館 1902年6月）【378/1367/#】

第五回内国勸業博覧会に際して刊行されたもの。博覧会場の写真に続いて口絵が入り、後半以降から案内文が綴られる。大阪市内を中心に、三島や豊能、近隣府県では岡山、広島の名所まで取り上げる。

「西は大江橋筋に至る。規模甚だ大ならずと雖も、此建詰りたる市の住民をして聊か心身を保養せしむるに足る。樹々の緑濃かに東亭に憩ふ人ベンチに腰掛けせる。三々五々漫歩を運ぶ。皆楽し気に涼風を貪るゝは夏の景なり。朝日ビーヤホール等散在し、銀水楼に美酒佳肴に飽くも可なり。住友氏寄附の図書館は目下建設中に属す」

■『実地踏測 大阪市街全図』（和楽路屋 1918年2月）【291.63/1208N】

大阪市の財力なども記す。裏面がガイドになっており、上町、天王寺、高津、中之島、天満などの記述がある。

「公園内なる図書館には数万の図書を備へ昼夜公開して閲覧者を待つ。東隣の公会堂には時々種々の催会あり日本銀行支店は市内第一の建築と云可く郵便本局に並て東洋第一の大阪朝日新聞社有」

■『大大阪独案内』（海事彙報社 1926年5月）【378/767/#】

「広告本位」ではなく、旅行者や買物客、仕入客、大阪市を視察する人のための旅行案内書。旅館の設備待遇や料亭、飲食店の批評、品物の精巧粗悪を調査するので、さらなる内容の充実のために読者からの投書を「切望致します」と書く。

「東天神橋剣先より西大江橋の間、中之島洲の尖端一帯を称し熱鬧の街に逍遙の別世界を造る。園内には各種の設備をなし、難波橋中間西に木村長門守誠忠碑あり。市公会堂あり。図書館と宏壮なる大阪市庁舎の中間に豊国神社あり。明治十二年の創建にて、豊太閤を祭祀する別格官幣社にして、境内に自玉神社あり。賽者多し」

■『大阪案内記』（大阪市役所産業部 1928年11月）【291.63/1323N】

「口絵」「沿革」「大都市計画」「交通」「産業」「教育」「社会」「保健」と市政全般にわたって記載されている旅行案内書。「名勝と遊覧地」では、大阪城、天王寺公園と茶臼山、住吉公園、住吉神社、生国魂神社、高津神社、天満宮、御霊神社、四天王寺、南北両御堂、道頓堀、千日前、新世界を紹介する。郊外については、各私鉄の沿線案内が記載されている。

「中之島公園は中之島の東端（市電北浜二丁目交叉点）にあり、堂島、土佐堀の二流左右に流れてまことに水の都に相応しき水の公園とも称すべきである。園内に豊国神社あり、境内には豊公の銅像あり、木村長門守の碑も建つてゐる。府立図書館、公会堂もここに並び建ち、音楽堂あり、運動遊歩の設備も整つてゐる。夏の夕は水に映ずる五彩の影を趁ふて本市随一の納涼場となり、頗る殷賑を極める」

■『大阪案内』（大阪之商品編集部 1936年1月）【378/393/#】

いわゆる大大阪と言われた頃の旅行案内書。「大阪市勢案内」「大阪遊覧案内」「大阪知名人士・諸機関案内」「大阪著名商工案内」「大阪便利案内」にわかれて大阪を案内する。

1941（昭和16）年の改訂版は、中之島に関する解説は、本書と若干の違いがあるだけだが、観光スポットの紹介は減っている。遊覧バス、観光艇「水都」のコースに沿った案内が順序もよいと記すが、非常時局により、バス、観光船とも休止しているとの断わりがあり、戦争の影響が観光に及んでいることをうかがわせる。

「淀川を二分して北を堂島川、南を土佐堀川とし、共に西流して船津橋で合し川口へと広がる。その絲瓜形の空間が中之島である。旧幕時代には各藩の蔵家敷軒をならべ、当時すでに大阪、否日本の経済の中枢であつた。殊に近年、公衙、大会社、大銀行などのオフィスが櫛比し、大阪のシヴイツク・センターをなす。島と兩岸とは、天神、難波の二大橋をはじめ、下流へ二十の美しい近代橋が、ボートのオールのやうに、中之島から兩岸へ架かる。これらの橋と川と、高層建築群とで表現されるシツクで明朗な現代的大景観は、まことに水の都大阪なるかなと嘆ぜしめる。殊に夕映華やかな頃、天神橋上流の將某島からこれを望めば、この世からなる楽天境の実感に、恍惚たらざるを得ない」
(抄)

■『修学旅行大阪見学』（大阪市役所産業部観光係 1939年3月）【291.63/1331N】

大阪市の編集した修学旅行用の案内書。大阪は「日本の台所」、学問の隆盛した「町人の都」、「實際を重んずる」街という。瓦の波、煙突から吐き出される黒煙、電車に乗る幾十万人の人の流れを大阪の横顔と紹介する一方で、娯楽施設、山川、神社仏閣などが点在する面を強調している。修学旅行団体取扱旅館の一覧も載る。

「大阪駅頭の雑踏に大大阪の面目の一面に接せし者は、南すること約一料にして大江橋に達し、橋を渡れば即ち中ノ島の中央白亜の大殿堂、三億五千万円の大大阪市政の出づ

るところ、大阪市庁の偉観に接するのである。

是より東へ、豊国神社・図書館・中央公会堂・銀行集会所等をはさみつゝ、細く長く水上公園の面目を發揮して堂島・土佐堀両川の分れる剣先に至る。

明治二十四年の開園にかゝり大阪最初の公園であり、九万三千余平方米、天王寺公園の三分の一に過ぎないとは言へ、交通の至便と水に恵まれ、市民の逍遙場として理想的なものである」

■『紀元二千六百年の大阪』（大阪市役所産業部観光課 1940年10月）【378/483/#】

神武天皇即位 2600 年に際して刊行された。大阪は神武東遷の際に難波の碕に船を泊めたことから海運交通の要衝として約束された土地といい、歴史を概観し、「これらの歴史的伝統的実録と実行力と気魄が基調となつて培はれた三千町会、三百余万の大阪市民が、商業に、工業に、貿易に、経済に、その他あらゆる文化面に於て、曠古の聖業を翼賛する姿こそ、わが大阪の明日への希望を約束する」と序を締めくくる。

「水の都に適しき中之島（水上）公園一帯

大阪市庁、豊国神社、府立図書館、中央公会堂、木村長門守の表忠碑、手形交換所があり、難波橋を越え、運動場、花壇を挟みつゝ細く長く水上公園の面目を發揮して、堂島、土佐堀両川の分れる剣先に至る。

大きさはさまで広くはないが、交通の至便と環境に恵まれ市民殊に附近のビルメン、ビルウイメンの好箇の逍遙場で、天神橋、難波橋、淀屋橋、玉江橋の名橋が架かる」（抄）

■牧村史陽『大阪ガイド』（東京法令出版 1961年8月）【291.63/107N】

大阪ものの出版物は売れないというジンクスを打破したいと考えていた牧村が、大阪府警本部からの依頼で執筆した出版経緯がやや特殊な旅行案内書。名所旧跡よりも、都市の様相、産業の状態の記述にまで手を広げ、誰一人手をつけなかった新しい形の大阪の旅行案内書を作り上げたと、牧村は自負している。

「大阪最初の市営公園。大正時代に難波橋と天神橋の間の大川を埋め立て、水上公園とした。水都大阪の代表的公園。天神橋近く、軍艦最上のメインマストが立てられたのは昭和4年。現代は“大阪市民国旗掲揚柱”として利用されている。大噴水塔は市制70周年記念事業の1つとして復旧したもの」（抄）

■『観光大阪のシリーズ』第1集・第2集（大阪観光協会 1968年8月 同年10月）

【378/599/#】

日本万国博覧会を前にして刊行された。数千万という内外のお客さんを迎えるにあたって、美しい町にし、公德心を高揚させ、来阪者はもちろん、府内在住の人々にも大阪のもつよさと味を認識してもらおうと企図された。

第1集で大阪観光の全般を、第2集で開発のすすむ大阪をクローズアップ。中之島の記述は第2集にある。

「御堂筋を境に東西はおもむきを変える。市庁舎から東は府立図書館、中央公会堂と続き、テニスコート、バレーボールコートを含む公園がのびる。さらに難波橋からはエアポケットを思わせる荒涼とした表情を持ち、悪臭を漂わせながらドス黒く川が流れる。御堂筋より西は日本銀行支店、住友、三井、電通、朝日ビル、関電ビル等が林立。天下の台所として江戸時代に諸大名の蔵屋敷が立ち並んでいたが、今でも大阪の中樞の役割を果し、中之島の歴史を現代的に再現しているともいえる」（抄）

■『浪花なんでも帖』（大阪観光協会 1983年10月）【378/965/#】

大阪築城四〇〇年まつりに際して作成された。表紙見返しにまつり関連のイベント一覧が載る。写真、イラストマップを多用した編集で現代的な旅行案内書の様相を呈している。

「荘厳な明治建築とバラ園。緑と水の美しい水上公園です
季節とお天気めぐまれた中之島は、そぞろ歩きには最高のオアシスコース。もちろん明治の洋館が川面に影をおとす冬枯れの景観も味わい深く、夏の炎天下に、ずらり並んだしだれ柳と川風のとり合わせもまた捨てがたいのですが」

■『るるぶ大阪』（JTB 日本交通公社出版事業局 1993年10月）【291.63/151N】

「見る 食べる 遊ぶ」が語源のムックタイプの旅行案内書。表紙のコピーや写真からその時期の大阪観光のメインがうかがえる。94年版より。

「文明開化の香りが漂う緑と水の都
堂島川と土佐堀川に囲まれた中洲が中之島。バラが咲き乱れ緑が繁る中之島公園は平日、休日を問わず、憩いの時間を過ごす人達であふれ返る。カップルのデートコースとしても最適なエリアだ。ビジネス街としてお固い建物が建ち並んでいるのも特徴になってい

るが、府立中之島図書館、中央公会堂など明治、大正の頃に建てられたモダンな建築群がランドマークとして人々の目を楽しませてくれる」

■『大阪ベストガイド 2009 年版』（成美堂出版 2008 年 8 月）【291.63/1054N】

ムックタイプの旅行案内書。写真が多用され、「食」「ショッピング」を中心に記述されている。

「水の都・大阪を実感させる街 レトロ建築も素敵

自然と文化に包まれたすがすがしい憩いの場

堂島川と土佐堀川に分かれた淀川本流に浮かぶ細長い島。20 ほどの橋が架かり、橋の下を水上バスが行き交う。大阪市役所や大阪府立中之島図書館、大阪市中央公会堂など、明治・大正時代のレトロ建築が建つ中之島には、中之島緑道やみおつくしプロムナードなどがあり、散策も楽しめる都会のオアシス的存在だ。その南側は、淀屋橋や北浜、本町といったビジネス街になっているため、ランチタイムには、ビジネスマンやOL たちが、青空の下でひと息ついている光景をよく目にする。

一風変わった観光を楽しみたいなら、川を行き交う水上バスに乗り、水上から大阪の街を眺めるというのもいいだろう」

[註]

①旅行案内書は、単に「ガイドブック」、または「観光ガイドブック」、「観光案内書」などさまざまに表記がされるが、本論では原則「旅行案内書」という言葉を用いることにする。

②各図書館の除籍基準に批評を加えることが本論の目的ではない。

③「シリーズ観光の大阪展-旅行案内書 [ガイドブック] にみる大坂 大阪 OSAKA-」

<http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/stjtop.html>

④大阪市発行のパンフレット『観光艇「水都」』（発行年月不明）による。

⑤「水都」のパンフレットを含め、前掲、「第一回 大大阪観光案内」で大大阪時代の旅行案内書から、当時の大阪のイメージの一端を紹介した。

http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/84_daiosaka.html

⑥対象とした旅行案内書は以下の通り（39 頁に一覧を記載）。垣貫一右衛門編輯『商工函館の魁 北海道独案内』（1885 年）、ジョン・パチュラー『日本北海道案内記』（1893 年）、上田文斎『日本名所図会内国旅行巻之五』（青木恒三郎 1899 年）、渡部義顯編『北海道遊覧案内』（富貴堂書房 1912 年）、鉄道

旅行案内編纂所編『鉄道旅行案内』(1921年)、札幌鉄道局運輸課『北海道旅行の栞』(1928年)、札幌鉄道局編『北海道温泉案内』(1932年)、高橋理一郎編『北海道案内』(北方文化協会 1935年)、鉄道省『日本案内記 - 北海道編』(博文館 1939年)、日本交通公社『新旅行案内』1 (1956年)、日本交通公社『最新旅行案内』1 (1960年)、北海タイムズ社『北海道冬の旅』(1967年)、日本交通公社『ポケットガイド1 北海道』改訂六版 (1975年、1970年初版)、実業之日本『ブルーガイド北海道』(1981年)、朝日新聞社『旅の百科』(1982年)、集英社『四季日本の旅 北海道』(1983年)、JTB『旅のノート北海道』(1994年)、JTB『エースガイド北海道』(1995年)、リクルート『じゃらんDE北海道 98-99』(1998年)、JTB『るるぶドライブ北海道 01-02』(2001年)。

⑦対象とした旅行案内書は以下の通り (10頁に一覧を記載)。鉄道院『*An Official Guides to Eastern Asia North-Eastern Japan*』(1914年)、田山花袋編『新撰名勝地誌』(博文館 1910年)、鉄道省『*An Official Guides to Japan*』(1933年)、鉄道省『日本案内記』(1930年)、運輸省観光部『*Japan The Official Guide*』(JTB 1952年)、運輸省観光部『日本案内記改訂版』(JTB 1952年)。

⑧『地球の歩き方』(ダイヤモンド・ビッグ社) や『ロンリープラネットの自由旅行ガイド』(メディアファクトリー) など。8-12頁にかけて212のシリーズの一覧が掲載されている。

⑨対象とした旅行案内書は以下の通り。早坂義雄『自然と人文 趣味の北海道』(1916年)、山崎鑿一郎『北海道の展望』(1932年)、高井弥作『観光の阿寒』(1933年)、鉄道省『日本案内記 北海道篇』(1936年)、札幌鉄道局『北海道旅行の栞』(1937年)、日本国有鉄道札幌地方営業事務所『アイヌの話』(1951年)、北海道新聞社『観光北海道』(1950年)、同『同』(1954年)、同『同』(1956年)、『国立公園 阿寒一巡り』(1951年)、『風土記日本第6巻 北海道篇』(1960年)、『図説日本文化地理大系第17巻 北海道』(1962年)、『北海道』(1962年)、『新しい日本第16巻 北海道①』(1963年)、『講談社版日本の文化地理第1巻 北海道』(1969年)、『温泉と旅の計画辞典』(1958年)、『旅と温泉』(1961年)、『カラー旅1 北海道』(1968年)、『朝日ソノラマ』第151号 (1972年)、『祭と芸能の旅』(1978年)、『日本の技1 みちのく至芸の里』(1983年)。

⑩前掲、「第四回 水都中之島のいまむかし」で紹介した旅行案内書を中心に記述する。「第四回 水都中之島のいまむかし」は http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/87_suito.html

[参考文献]

- ・岩佐淳一「旅行とメディア - 戦前期旅行ガイドブックのまなざし -」『学習院女子大学紀要』第3号 (学習院女子大学 2001年)
- ・岩田晋典「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」『立教大学観光学

部紀要』第12号（立教大学観光学部 2010年3月）

- ・中川浩一『旅の文化誌 - ガイドブックと時刻表と旅行者たち』（伝統と現代社 1979年2月）
- ・中之島尋常小学校創立六十五周年 中之島幼稚園創立五十周年記念会『中之島誌』（中之島尋常小学校創立六十五周年中之島幼稚園創立五十周年記念会 1937年）
- ・なにわ物語研究会『大阪まち物語』（創元社 2000年3月）
- ・橋爪節也編『映画「大大阪観光」の世界-昭和12年のモダン都市-』大阪大学総合学術博物館叢書4（大阪大学出版会 2009年4月）
- ・山口誠『ニッポンの海外旅行-若者と観光メディアの50年史』（筑摩書房 2010年7月）